理研会報

発行
印旛研理科研究部
事務局
成田市幸町948の1
成田小学校内

理研会報百五十号発刊にあたって

理科研究部長　酒井小　川勝　丸重

印旛研理科研究部の機関紙「理研会報」も、第一五〇号の発刊となりました。本研究部のすばらしい発展と充実の歴史と伝統を証明するものであります。

創刊は昭和四十年、当時の研究部長は板橋義夫先生（印西町教育長）副部長は牛嶋竹利先生（八千代台小校長）藤崎正雄先生（元竹袋小校長）幹事に飛田育男先生（印南小校長）武藤喜正先生（公津小校長）で、各部会長は一部会は五味健先生（印旛出張所指導主事）二部会は中村欽哉先生（成田市教委次長）三部会は穴沢鉦治先生（白井一小校長）四部会は古谷弘先生（印旛出張所社教主事）と記載されています。

編集には、現在と同様研究部幹事があたり原稿依頼から割りつけまで大変御苦労なされたことと思います。筆耕印刷は鉄筆使いの名手中村先生が毎号読みやすく届けてくださいました。記事については、主に理科研究部のベテラン先輩、毎日の授業のおこなっている小中学校の理科指導の先生方の実践的な生の声で、すぐに活用できる具体的な実験観察の方法であり、お宝なデーターである場合等が、現在に引きつがれているといえましょう。

またベテラン先輩が永年ひとりでこつこつと植物栽培で苦労してきた話、理科主任の理科実験室内の活用方法の工夫、学校栽培園観察池の紹介、自作器具の紹介等、多面的で図示入りであることが一層わかりやすく、どこの学校の誰々先生とお顔を想い浮かべながら内容を読ませていただくと親しみやはげみが満ちあふれてきたものです。

一研究部の機関紙で、一五〇号十九年間も続いていることは他では考えられないことであり、これを今まで支えてきた力は「すぐ現場で誰でも活用できる」ことを、モットーに発刊されてきた理研会報の初期の姿を持続してきたためものと考えます。理科研究部を支えている力は、理研会報を続刊させていく力は、先生方一人ひとりの理科教育を愛する心と研究をしていく意欲だと信じています。一五〇号、三〇〇号の発刊を期待しています。

会報発刊の趣旨を見つめ直す。

第五十号発刊当時の部長　成田小　飯田　和幸

理研会報第一号が昭和四十年に刊行され、二十年間に渡り研究部活動の糧となり、ここに第一五〇号の発刊を迎えています。これも編集刊行に当った歴代事務局の熱意と、皆さんの理解と協力が守り育てて来たものと思います。今、理研会報発刊の経緯を回想するに、平易で親しみのもてる、理科、を願い、充実を研究活動の活発化に求めたものです。理解と協調は身一歩の感が強く、対話と交流の場を大切にする働きかけが話題となり、協議検討され会報発刊に結び付いたことが想起されます。

趣旨に「科学する目を大切にし正常に育むため共に学ぶ」を柱に。会報は、対話と交流の場であり よりどころであること。

。会報は、個々の研修、研究活動の資料提供を配慮すること。

。永続的な刊行を維持すること。等の検討内容が記憶に残ります。

ここに理研会報発刊の経過と共に、研究活動の推移にかかわりの深い団体の結成と変革の流れを見る昭和初期に於ける教育現場の中核は「教育会」の名称で、傘下に、部会制の地域区分をもった。昭和二十年代、民主主義への急転が、「教職員組合を誕生」。次いで、学制施行の翌年「印旛支部」の結成で、研究活動と対比的に見る。

理科研究の実践と実績はすばらしい年輪をもつ、同好会の運営は、昭和八年頃の発足と聞く。二十年代初めの混沌とした時代は教育の維持に止まり、研修は凋落する。学制施行後復調し輝かしい足跡を身に伝える。その活動は、混乱と物資の欠乏が教員教材の調達や自作教具等、教師の努力にかかり献身的な努力と熱意が補う。内容は、。ローカルプランの編集、。観察実験用具の自作研修、。製作技術の修得等、資材の収集にリュックを背負い東奔西走、子どもと共になげ励んだ時代です。当時印旛支部には文化部なる独自母体をもつも、実質的な活動の視点から、呼び名を、同好会、研究部と使い分けたものです。会報発刊の翌年に名実共に研修を司どる、印旛研、千教研、が手順よく結成されました。

（内面に、国と県の補助―詳細略）

総合的な研究団体の誕生です。印教研結成の当地区は従来の流れから、各部と異なり、組織と運営が体質的に変則的で検討の声が高い。

教育現場は、教育制度の改革を諮問し、二十一世紀に向けてその歩みも大切な岐路を迎えている。

一こと添えるならば、研究の組織がなく同好会にゆだねた時限も過ぎて、ここに研究部活動二十年その役割の大切な時期でもある。組織に活力を得させ、先の同好会のルを範とし、地区別、分野別、研究問題別、に研修計画を組み立て運営の調整を明確にして、

。同僚どの研鑽の場に、。初任者の学ぶ場に、。技能の習得の場に、上げて、「同一歩調の体制作りと、運営充実を期する。」ときではあるまいか。時に、各教科の研修に同好会開催などの声を聞くが、所属研究部活動の正常な運営と効率化を育み、筋の通、た協調と配慮に心がけ研究部組織を生かし、落ちのない指導力の向上を計る運営の大切な教育現場の実情であろう。

理科も同様に、会報発刊の趣旨を生かし、理科研究部活動の益々の充実と、その大きな成果に期待をよせて、項を終ります。

会報100号によせて

第百号発刊当時の部長　白井一小　穴沢　鉦治

昭和53年7月10日号をもって会報が百号となりました。

研究部ではこの号を記念号とする特別企画をたてました。

新聞のような印刷で、大きさもそのようにする。写真も入れようということでした。中でも二面・三面を会報についての歴代研究部長の座談会をのせることになりました。出席された方は、

板橋義夫先生　成田小学校長
飯田和幸先生　東葛出張所長
藤崎正雄先生　六合小学校長
穴沢鉦治　研究部長

他に幹事の佐藤幸納先生、出張所から武藤喜正先生等にも参加を頂きました。

司会は、私穴沢がいたしました。

理研会報創刊時の研究部長の板橋先生に、まず「当時を回想して」……と水を向けますと、

板橋先生は、「話しを始める前に一言申し上げたい。それは、この会報がこんなにも長く継続され、内容もますます充実して百号を迎えた事、実に私にとっては感激です。実のところ、会報を発行しようという案の出た時、まあいいだろうぐらいの気持ちだった。それがこんなにも成長している、研究部の皆さんに本当に感謝の気持ちでいっぱいです。」

板橋先生にしては珍らしく感情のこもった発言でした。

歴代部長一同は一斉に思わずしんみりしてしまいました。

おそらく胸中を去来するものは、板橋先生と同感のものがあり、よくぞここまで……の感深きものがあったからでありましょう。

それから、戦争直後の物資欠乏時代の自作教具作成時代の苦労話、実験を取り入れる授業を奨励した歩いた時代、思考力・創造力の育成、問題解決学習全盛時代等 会報となるせていろいろな話に時間をすごしました。

長い事が必ずしも功多きことは言い切れないが、ともかくもこの灯を消さない努力を期待しつつ座談を終了しました。会報が充実し100号まで伸びた事に感謝申し上げます。

教研発表の感想　昼員の声

出席して　よかった。

八街東小　加瀬百合子

校内での諸行事が多い中、教研の準備、御苦労は大変でも。しかも各部昼とも個人の研究でなく、グループで協力して進めているのは大変よかったです。同一校でないとなかなか協力はむずかしいことです。やはり、教研発表の翌日より、来年への見通しを立て進めていく大切さを　身　感じております。日頃、研究してみたいと思っていても一人の知恵だけではどうにもなりません。部員の知恵を出しあい、研究を深く掘り下げることが、教師の意義の一つでもあると、改めて考えました。また、内容も一年間の実践を通しての綿密な記録・資料は、即　授業に役立つ内容でよかったです。

教研集昼に参加して

吾妻小　木村　豊

本年度の教研集昼に参加して、自然に対して報告が多かった。第一部昼では、ヒマワリの成長を子供たちに直接経験させ、その記録をのせている。また、ヒマワリを標本にするなどすばらしい試みが報告された。第二部昼では、カタツムリの生息状況や入手方法などの地域にあった報告があった。第三部昼では、自然にふれあうことによって意識を高める報告、など第四部昼・五部昼にも研究の成果があらわれていて、興味深く参加することができました。たった発表昼ではあることは、研究していく上での問題点が話しあいの中から出なかったことです。提案だけに終らず問題を解決していく場にしてほしい。

教研集昼に参加して

小竹小　門脇　興次

各部昼の発表を聞いて思うことは、それぞれの提案が実践によってうらづけられており、決して一朝一夕にできあがったものではないであろうということです。

一部昼の場合も、提案までに日、何度も研究員集昼がもたれ、時には深夜にまで及びました。私自身その一員として参加することができ、多くの面で　貴重な経験をうませてもらったと思っています。

教研集昼への参加　姿勢には、即明日の授業に役立つ何かを期待する人や、自分の実践の反省をする人などが考えられますが、確かにこの日の提案から何かを持ち返ることができ、教師の力量を高めるより機会であったと感じています。

高学年分科昼に参加して

白井中　河辺　久男

昨年度からのいきがかり上、小学校高学年の分科昼へ参加させていただきました。四部昼の電磁気の実践や五部昼の体感を重視した自作教具の作成には、思わず自分もさわって実験してみたい気持ちにかられました。体感を重視し、必要な教材教具を開発していくやり方とは賛成であり、両部昼とも教研に参加する熱意、いきごみが十分感じられた内容でした。

モンシロチョウの生物教材では発展としてチョウの標本づくりも指導しておいたらいいと思いました。こうすれば夏休みの理科作品展も、きちんとした展翅標本が出品されて、たたピンでとめただけの標本がなくなると思います。

教研発表昼に参加して

千代田中　角井　一郎

三部昼の発表「人間と自然の検討」は、研究として価値の高いものであったと思います。誰にもが試みようと思いながらもやれなかった分野であり、その姿勢に敬服します。

また、五部昼の研究は、自分自身の教材観を見つめ直すよい機会であったようと思います。3年間三「見通して系統性を～」という内容であり共同で研究に取り組んでいくことの重要性も学びました。

～の発表からも毎日の授業そのもの　どう組んでいこうかという態度　ひかえ実践に役立ちます。経験を　また先生方のお話も同えたらよい研修昼になるのではと考えます。

第三十四次印教研に参加して

井野中　畠山　作一

この四月に初めて教壇に立ち、はや半年が経過しましたが、月日の発表を見て、この間の学習指導が、まだまだ不十分であったと改めて感じました。

毎回　5つの発表を聞かせて頂きました。どれもその根底には、いかに　たら生徒にとってよりわかるよ　となるか、という熱意が感じられました。また多くの先生方が　々な質問をされ、活発な討　が行われたことや、自作の教具　製作されていることなど非常に刺激になりました。私もこの刺激を基に　がんばりたいと思います。

助言者の感想

小学校低学年分科昼

指導主事　九味　健

教研集昼に参加して一つの問題があることに気づいた。それは、三年をもって研究を一応終了してしまうことと、数少ない実践例で結論づけてしまう傾向が見られることである。

型にはまった研究計画でなく、もっと柔軟性のあるものにしたい。そして、複数の学年・教材を連続したものとしてとらえ、多くの実践を重ねることによって子どもがどう変容していったかを追跡する必要があるのではないか。

又、十月の教研発表をもって研究を終了してしまう傾向がみられる。そうではなく、この発表をひとつの節にして次の研究に取りかかる連続性が望まれる。

いろいろと事情があるにせよ、そうしなければ教研をより魅力ある、しかも充実したものにすることは出来ないのではないか。

いずれにしても提案者・研究員の皆さん、ご苦労様でした。

昼員の皆さんも研究を支える一員だという意識をもって研究に協力されることを願っています。

中学校分科昼

上志津中　折目　肅雄

例年になく活発で充実した集昼であったと思う。これは、昼員の熱心さにもよろうが、各部昼の提案がうまくまとめられ、更に適当な問題を含んでいたことによると考えられる。各部昼とも大きなテーマを、二年三年と追求を重ねて本質的な、そして討論することが有効な問題が浮き彫りにされていたからであろう。

どの部昼も共同研究であり、これだけの発表ができる裏には、各校からの研究員が夜を徹して討論し、実践を繰返した姿が想われて頭の下がる思いがした。小中一貫のテーマもあって、小中の連携プレイに将来の期待を持てることも楽しみである。

研究とは、考えれば考えるほど追求すればするほど、問題が大きくなり、難しくなっていくものである。特に教育研究は、対象としての生徒にどう影響を与えているかが、出発点であり帰着点であることを考えると　「評価」「調査」について一層厳しく吟味していくことが、昼後の研究に望まれるのではなかろうか。

小学校高学年分科昼の助言者の原喬は　未着です。

昼報のあゆみ　101～104

101号　地方理科センター研修（岩立）
102号　理科センター研修（宮鍋）
103号　低学年理科作品展（折目）
104号　低学年理科アイディア集（折目）
105号　実践記録（宮鍋）
106号　研究部の挨拶に寄せて（宍戸）
107号　実践記録（佐藤）
108号　実践記録（倉次）
109号　実践記録（佐藤）
110号　低学年理科アイディア集（折目）
111号　理科作品展（折目）
112号　新指導要領全面実施に当って（折目）
113号　21年間の幕をとじる。地方理科センター
114号　不明
115号　教研集昼に向けて
116号　理科作品展
117号　理科研究発表大会（磯辺・鈴木）
118号　碧志野大昼から
119号　実践記録（御園）
120号　教研集会へ向けて
121号　教研修行事に参加して（松本・石橋）
122号　指導要領（都筑）
123号　新年度を迎えて
124号　指導計画（県展から）（武田）
125号　理科研究（印旛地区）
126号　教研指定（佐倉）
127号　究極の理科作品（北辺小）
128号　校内研究（佐倉）
129号　日々の実践の中から（武藤）
130号　昼員として（安藤）
131号　教研へのとりくみ
132号　実践記録（石田）
133号　実践研修報告
134号　研究作品展
135号　教研の風潮（田）
136号　実践記録（田）
137号　教研研究（大昼）
138号　教研の報告（時浦）
139号　教研と現（安藤）
140号　実践記録（藤）
141号　相馬地区（小川）
142号　教研報告（藤崎）
143号　教研報告（大木）
144号　教研報告（二宮）
145号　教研報告（小川）
146号　教研報告（出井）
147号　教研報告（井上）
148号　教研報告（井上）
149号　教研報告（井上）
150号　教研報告（井上）